

図書館(室)に通ってみよう！

大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員PD 林 創

あらためて考えてみると、研究とはかなり贅沢な活動と言えそうです。たとえばワーグナーがルートヴィヒ二世の庇護を受けていたように、芸術家たちの多くはパトロンがいて資金の援助を受けて活動が続いていたわけですが、勉学・研究に従事する者も政府や企業などからの研究資金の援助がなくては継続して活動が続けるのが難しいものです。このように研究を遂行するには、どうしても費用の面を意識せざるを得ないと思います。しかしながら、費用の面を気にせずに研究活動を支援してくれるものがあり、それこそが自由に使える図書館といえるでしょう（もちろん、授業料や税金などによって成り立っていることを決して忘れてはなりません）。

私は京都大学で学びはじめて今年で8年目となりましたが、入学当初を振り返ると、現在までの間に図書館に関する多くのことが変わったことを感じます。

その第1は、情報の電子化です。たとえば、最近では飛行機の機内で映画などを自分の好みの時間に見ることができるようになってきたところで、こうしたサービスは「オンデマンド（on demand）」と呼ばれています。図書館においても、情報の電子化により、このようなオンデマンドのサービスが高度な形で進行していると思います。たとえば、開館時間に左右されることなく、研究室でオンラインジャーナルから研究論文をチェックし、必要な文献をダウンロードして入手することが可能になりましたし、自宅で研究活動をしているときに文献が必要になれば、いつでも京都大学に蔵書がないかをOPACでチェックできるようになりました。こうしたサービスは、研究のスタイルを以前と比較して根本的に変えたすばらしいものといえるでしょう。

第2は、自分自身の図書館との関わり方です。私はもともと本が好きなこともあって、入学当初から図書館に行く機会が多かったと思います。私がよく利用していた（そして、今でももっともお世話になっています）教育学研究科・教育学部図書室は、蔵書が地下の書庫に開架式で収納されています。そこで、大学に来るとしばしばこの書庫に入り、文献を探索したものです。真夏でもひんやりとして、独特のにおいがする書庫には、次第に愛着がわいてきます。あまり明確な目的も持たずに、図書室に入り、本を気の向くまま探して読んだり、絶版本などの中に研究のヒントになりそうなものを見つけてニヤリとする、そんな時間が案外良いものでした。こうしたことを続けていると、しだいに背表紙やタイトルを見るだけでも、自分にとっておもしろそうな本かどうか、あるいは必要な本かどうかを判断する感覚が鋭くなってきたように思います。また、図書室の司書の方々との雑談から新たな研究のアイデアが生まれたり、貴重な文献を紹介していただいたことも頻繁にあります。

最近では、上記のようにオンデマンドによるサービスを利用できるようになったことや、その他の仕事が増えて時間がなくなってきたこともあり、明確な目的を持たずに書棚を探索する機会や、司書の方々と雑談する機会が明らかに少なくなりました。継続して勉学・研究を進めるために不可欠な研究資金の援助を受ける機会は増えてきましたが、本の背表紙やタイトルで必要性などを判断する感覚は鈍くなったように感じますし、研究のアイデアを生み出す大事な機会を失っているような気もしています。それらを取り戻すためにも、また図書館（室）に頻繁に出入りして、これまで以上にお世話になりたいと思っています。（はやし はじむ）